

平城京東市跡推定地の調査 XIII

第16次発掘調査概報

平成7年

奈良市教育委員会

(表紙)

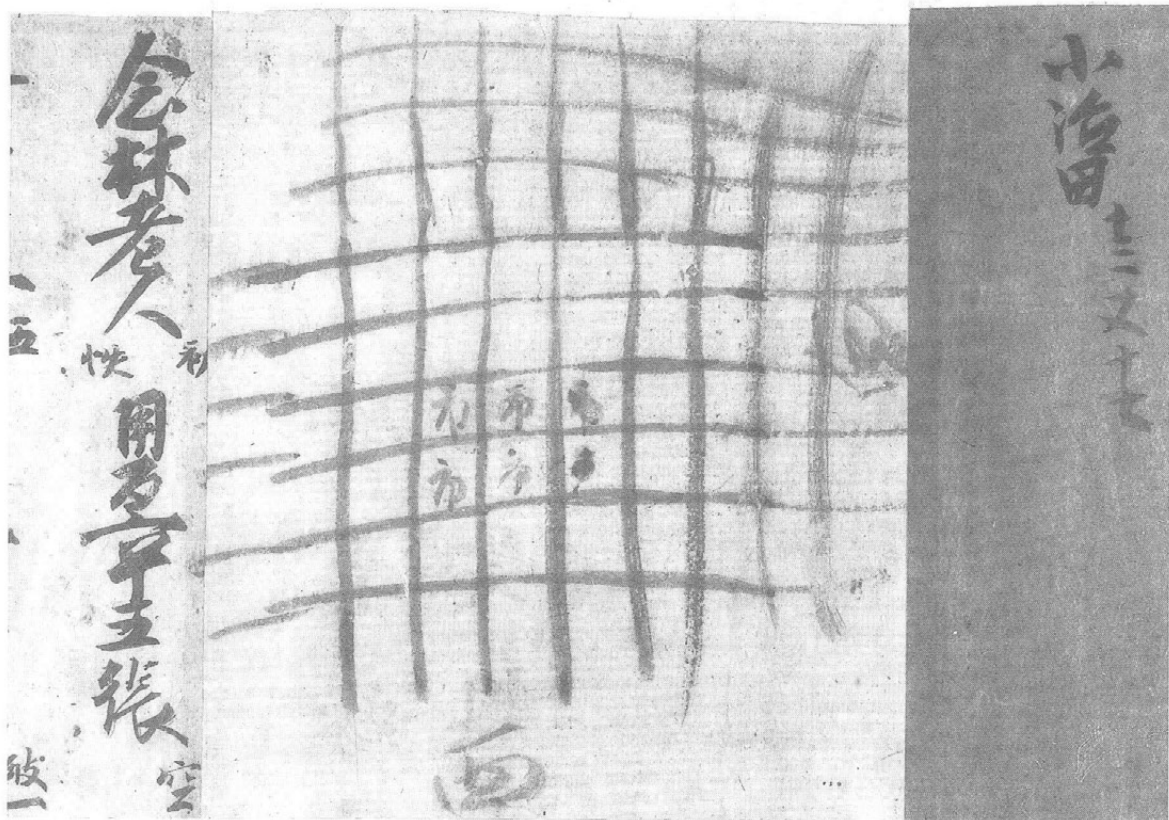


fig. 1 平城京市指図 (浄土宗総本山知恩院所蔵『写経所紙筆授受日記』背紙)

序

東の市の植木の木垂るまで逢はず久しみうべ恋ひにけり

この歌は「風流侍従」として知られる門部王が東市の樹を詠ひて作る歌として『万葉集』に収められているものです。当時、東市は市として活気あふれる場所であったと同時に大宮人をこんな気分にさせてしまう場所でもあったのでしょう。

昭和56年度から実施しております東市跡推定地の調査も、本年で16次を数えることとなりました。この東市跡の調査は私どもの教育委員会が実施しております発掘調査の中でも、計画的且つ継続的に行なっている調査として重要な位置を占めております。それは今日の市場もそうであるように、当時の東市は、平城京住民の日々の暮らしを支えた、特に重要な場所であったからであります。また、経済面だけではなく、東市は上記の歌にみられるような人々が集う、出会いの場でもありました。このような市の景観を皆様に想起していただけるようにするためにも、今後も着実に調査成果を積み上げ、この遺産を後世に伝えていくことが我々の責務と考えております。

最後に、調査にあたりまして、多大な御理解と御協力を頂きました土地所有者の松田憲二氏をはじめ、地元の皆様に厚く感謝致します。また、数々の御指導を頂いた奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、今後も一層の御指導をお願いするものです。

平成7年3月

奈良市教育委員会
教育長 河合 利一

例 言

1. 本書は、平成6年度に実施した平城京東市跡推定地第16次発掘調査の概要報告である。
2. 調査回数、調査期間、面積及び調査地の地番は下記の通りである。
第16次調査 平成6年11月17日～12月27日 325㎡ 奈良市杏町589-1
3. 調査は奈良市教育委員会社会教育部文化財課埋蔵文化財調査センター（課長：安田龍太郎、埋蔵文化財調査センター所長：吉川邦彦）が実施した。現地調査の担当は技術吏員池田裕英、庶務担当は主任杉村武史である。なお、調査補助員として田林香織（奈良大学卒業生）が参加した。
4. 調査にあたっては、土地の所有者である松田憲二氏の御理解と御協力を頂いた。記して感謝致します。
5. 本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部、浄土宗総本山知恩院から、写真、地図を提供して頂いた。記して感謝致します。
6. 本文中で使用した遺構の分類記号、土器の器種名等は奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 VII』に準拠した。
7. 本書の執筆、編集は池田裕英が担当した。

目 次

I	はじめに	1
II	検出遺構の概要	1
	1 南発掘区	3
	2 北発掘区	4
	3 出土遺物	5
III	まとめ	6

図 版 目 次

fig. 1	平城京市指図	表紙裏	fig. 10	南調査区全景	（北から）	9
fig. 2	平城京の条坊と東市の位置図	1	fig. 11	南調査区全景	（南から）	9
fig. 3	過去の調査位置図	2	fig. 12	北調査区全景	（南から）	10
fig. 4	東市推定地調査一覧表	2	fig. 13	北調査区全景	（東から）	10
fig. 5	土坑S K 248土器出土状況図	3	fig. 14	建物S B 245	（西から）	11
fig. 6	南発掘区遺構平面図	4	fig. 15	建物S B 247	（東から）	11
fig. 7	北発掘区遺構平面図	5	fig. 16	建物S B 246	（東から）	11
fig. 8	出土土器図	5	fig. 17	土坑S K 248	（北から）	12
fig. 9	左京八条三坊六坪検出遺構平面図	7.8	fig. 18	土坑S K 249・250	（南から）	12
			fig. 19	溝S D 215	（西南から）	12

1 はじめに

平城京の東市が「平城京市指図」(fig. 1) から左京八条三坊五・六・十一・十二坪に位置するらしいことが知られ、奈良市教育委員会が継続して調査を実施してきて、本調査で16次を数えることとなった。平城京住民の日々の暮らしを支えたであろう東市が平城京でも特に重要な遺跡であることは言を待たないが、古代の都城において市は

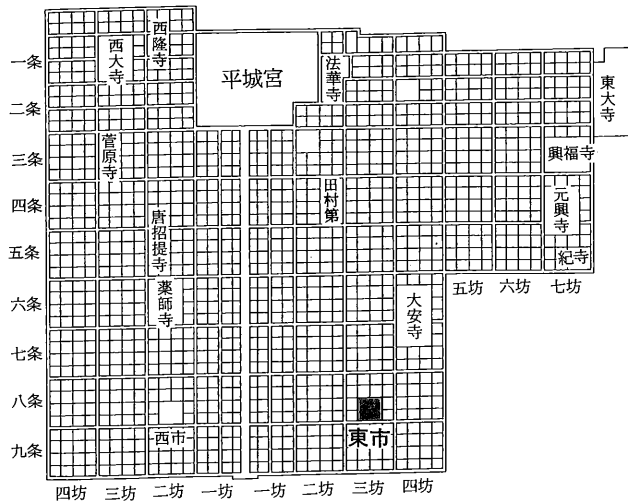


fig. 2 平城京の条坊と東市の位置図

どのような位置に置かれていたのであろうか。

我が国最初の条坊制による街区が整った都と考えられている「藤原京」の市については出土した木簡の記述から、宮の北もしくは北東にあったと考えられている。『周礼』の「考工記」によれば「面朝后市」と市は宮の北に位置するとされており、中国の都城をまねてつくられた「藤原京」が中国風の形態を採用していることは当然といえるかもしれない。先の木簡の記述では「市」とのみ記され、平城京のように東西市があったかどうかについては不明であるが、『扶桑略記』には大宝3年(703)に東西市を立てた記事がみられる。

『続日本紀』では天平13年(741)年に平城京の二市を恭仁京に遷したこと、延暦3年(784)の長岡京遷都の前兆と考えられている記事に「難波の市の南道」という記載があり、恭仁・難波の二京にも市があったことはわかるが、その位置については不明である。

長岡京では(旧)右京六条二坊四町の調査で「司」から物を進上したことを示す木簡が出土したこと等から「西市司」の可能性が高いとされ、東市も左京の同じ位置に想定される。

平安京では『延喜式』の「左右京図」などから東市が左京七条二坊に、西市が朱雀大路をはさんだその対称の位置にあったことが知られる。これまでに市町やその周囲に展開した外町の調査が行なわれ、9世紀前半からの遺構、遺物がみつまっているが、小規模な調査が多く、市の実態を窺えるような成果は得られておらず、今後に期待される部分が多い。

以上のように、都城の市に関しては文献による考察が中心で、考古学の面からの成果ということになるとまだまだ不十分である。平城京の東市跡推定地周辺は長岡遷都後、すぐに水田化していったようで、遺構の残り具合も悪くない。このような遺跡を継続的に調査することにより平城京東市の位置並びに構造について明らかにしていくことは、上述のような観点からみても重要な意味があり、その成果が期待されるところである。

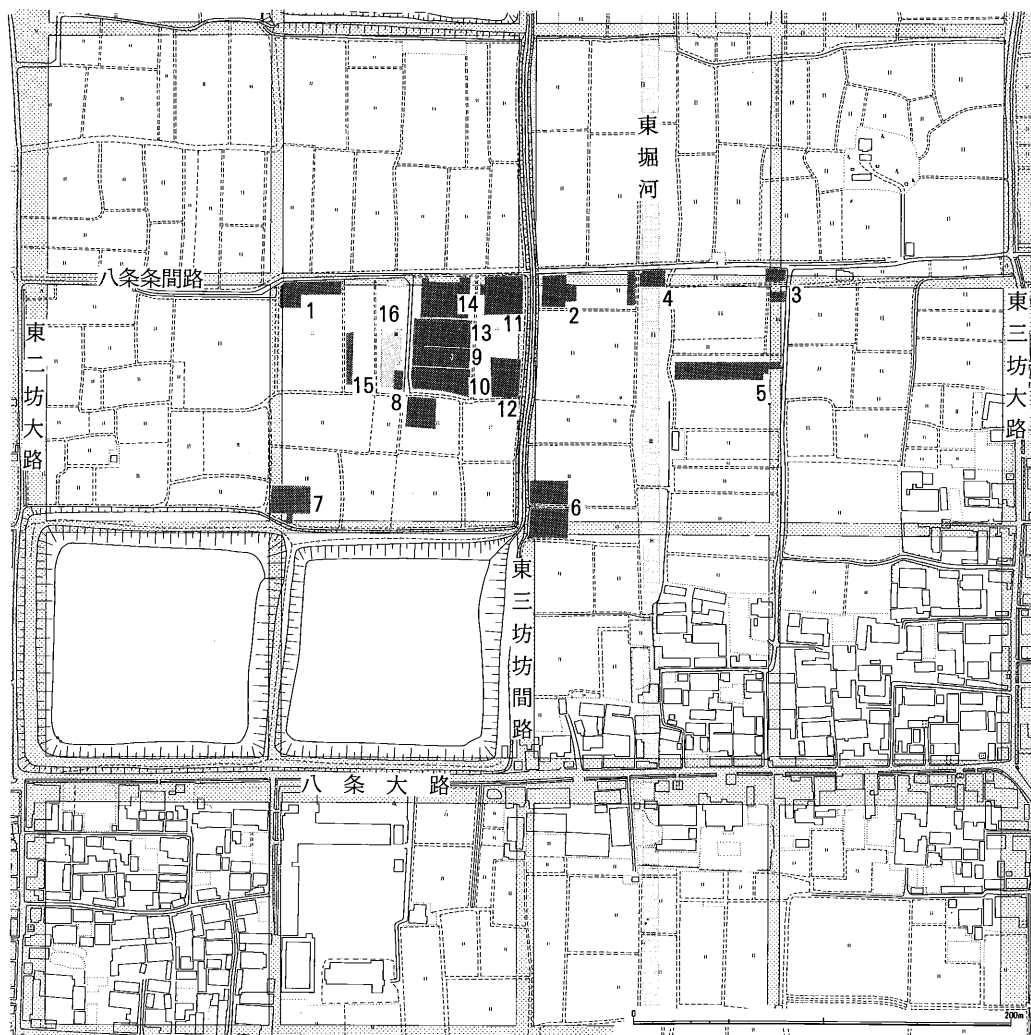


fig. 3 過去の調査位置図1/4,000 (奈良国立文化財研究所1963年作製 1/1,000「東市」使用)

調査回数	調査期間	調査地番	面積	調査回数	調査期間	調査地番	面積
第1次	昭和57年2月15日 ～3月30日	杏町583-1	240㎡	第9次	昭和63年11月24日 ～平成元年1月11日	杏町580-1	300㎡
第2次	昭和57年4月20日 ～8月7日	東九条町 441-1	240㎡	第10次	平成2年1月17日 ～3月20日	杏町580-1	410㎡
第3次	昭和57年5月19日 ～6月24日	東九条町 493-1 444	125㎡	第11次	平成2年11月5日 ～12月28日	杏町579-1	410㎡
第4次	昭和58年4月20日 ～6月24日	東九条町 444-1 442-1・2	220㎡	第12次	平成3年10月14日 ～11月22日	杏町579-1	300㎡
第5次	昭和59年11月9日 ～12月26日	東九条町445	510㎡	第13次	平成4年11月10日 ～12月18日	杏町580-1	449㎡
第6次	昭和60年11月19日 ～61年3月19日	東九条町437 438	600㎡	第14次	平成5年11月12日 ～12月27日	杏町580-1	460㎡
第7次	昭和61年11月4日 ～62年1月22日	杏町592	340㎡	第15次	平成6年2月22日 ～3月7日	杏町 582-1・4	84㎡
第8次	昭和62年10月21日 ～12月25日	杏町586 581-1	290㎡	第16次	平成6年11月17日 ～12月27日	杏町589-1	325㎡

fig. 4 東市跡推定地調査一覧表

II 検出遺構の概要

1. 南発掘区

発掘区は六坪の中央北寄りに、一部第8次調査の発掘区と重複するように設け、調査面積は295㎡である。発掘区内の堆積土層は、上層から黒灰色土(0.2m)、灰褐色土(0.2m)、灰褐色粘質土(0.1m)と続き、現地表下0.5mで黄茶色粘土の地山にいたる。灰褐色土、灰褐色粘質土は遺物包含層である。遺構はすべて黄茶色粘土層の上面で検出した。遺構検出面の標高は概ね55.6mである。検出した遺構には掘立柱建物、土坑、溝がある。

S B 244 発掘区東辺北寄りで検出した、南北2間(4.5m)、東西1間(2.1m)以上の建物である。発掘区外東へ続くが、第9・13次調査区には続かないことから、東西3間以内に収まる。柱間寸法は南北が北から2.3m-2.2mで、東西が2.1mである。建物の主軸は国土方眼方位北で西に振れる。

S B 245 発掘区東辺中央部で検出した、南北3間(5.4m)、東西1間(2.1m)以上の建物である。発掘区外東へ続くが、第13次調査区には続かないことから東西は2間以内に収まり、南北棟建物になると考えられる。柱間寸法は南北が1.8m等間で、東西が2.1mである。建物の主軸は国土方眼方位北で西に振れる。

S B 246 発掘区中央西寄りで検出した、桁行2間(2.7m)以上、梁間2間(3.0m)の東西棟建物である。発掘区外西へ続く。柱間寸法は桁行が2.7m、梁間が1.5m等間である。建物の主軸は国土方眼方位西で南に振れる。

S B 247 発掘区西辺南寄りで南北2間(4.2m)を検出した。発掘区外西へ続く。柱間寸法は2.1m等間である。建物の主軸は国土方眼方位北で西に振れる。

S K 248 発掘区北端で検出した土坑である。東西0.9m、南北0.8m以上の平面不整形形で、発掘区外北へ続く。深さは0.2mである。底面から少し上のところで須恵器の甕が据えられた状態で出土した(fig5)。

S K 249・250 とともに発掘区北西部で検出した土坑である。S K 249は東西1.2m、南北6.5m以上の南北に細長い土坑で、発掘区外北へ続く。底面は平坦ではないが、深さは概ね0.4mである。S K 250は東西3.7m、南北0.8mの東西に細長い土坑である。西から東へ深くなり、深さは西端で0.1m、東端で0.4mである。ともに平城宮土器Ⅲに属する土器が出土した。この2つの土坑は逆L字形になっており、この土坑の北西

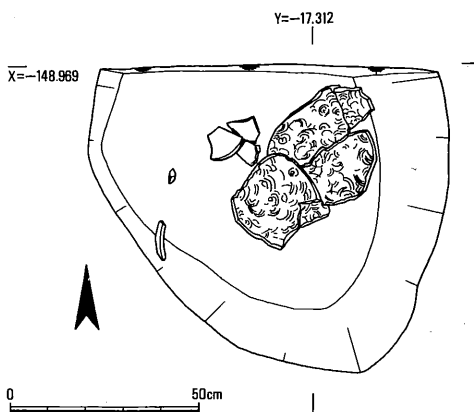


fig. 5 S K 248土器出土状況図(1/20)

の一面を画するような性格をもつものであったことも考えられる。

SK251・252 SK251は発掘区北端中央で検出した。東西が2.3m、南北が1.6mの平面不整形の土坑である。深さは0.7mである。SK252は発掘区中央で検出した。東西1.5m、南北1.2mの平面不整形の土坑である。深さは0.5mである。いずれの土坑も灰色細砂層まで掘られており、湧水が激しいことから井戸枠の抜き穴である可能性も考えられる。

SD215 発掘区の中央を北東—西南方向に流れる素掘溝で、第13・14次調査で検出した溝と一連のものである。幅は0.7~1.0m、深さは0.2mである。遺物が出土しなかったため時期は不明である。この他にも斜行する溝を数条検出した。

これらの遺構の時期は、出土した遺物からSK249・250は奈良時代中頃であることがわかるが、SB244~247、SK248・251・252については奈良時代であることはわかるものの、出土土器がいずれも小片のため詳細な時期を特定することができない。また、SD215やその他の斜行する溝についても遺物が細片のため、時期を特定することができない。しかし、遺構の重複関係や周辺の調査例からみて古墳時代以前の遺構であろう。

2. 北発掘区

六坪の北辺中央に、門などの施設の有無を確認するために設けた発掘区である。発掘区は東西10m、南北3m（面積30㎡）である。

発掘区内の層序は上から黒灰色土、灰褐色土、茶褐色土と続き、

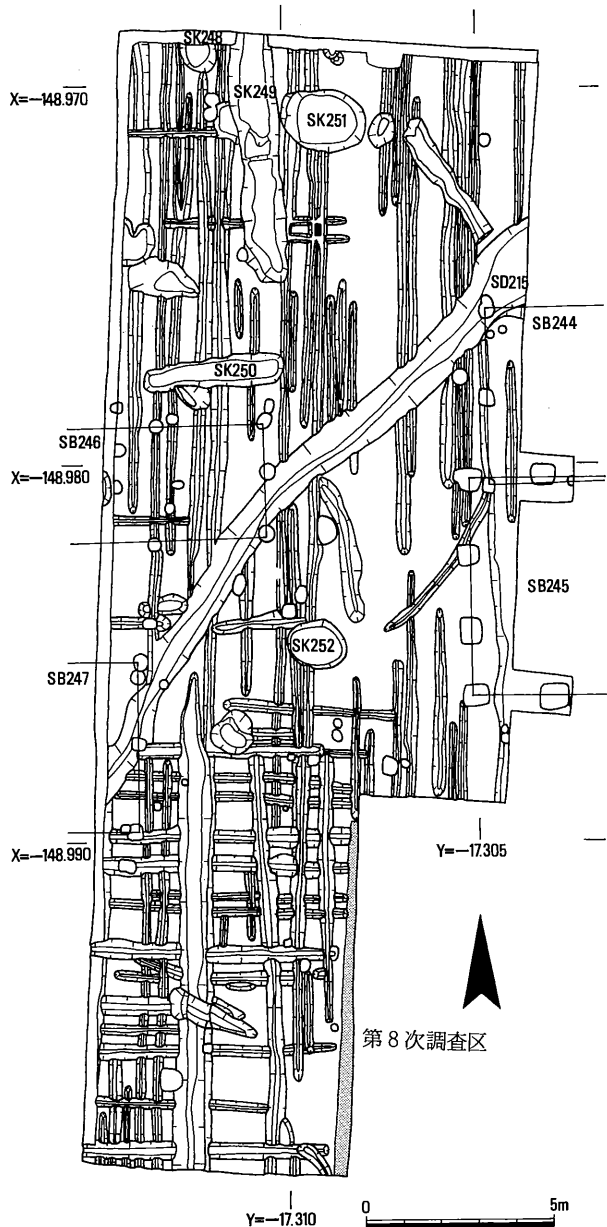


fig. 6 南発掘区遺構平面図 (1/200)

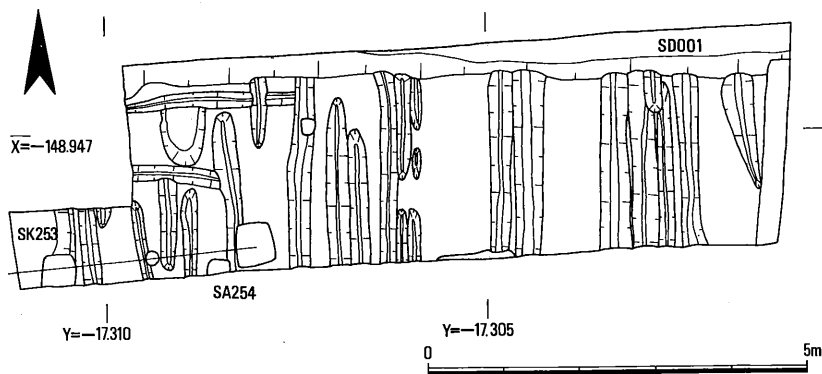


fig. 7 北発掘区遺構平面図 (1/100)

現地表下約0.5mで茶黄色土の地山にいたる。遺構はすべてこの地山の上面で検出した。遺構検出面の標高は55.5mである。検出した遺構には条坊道路側溝、土坑、掘立柱列がある。

SD001 発掘区北端で検出した八条条間路南側溝である。幅0.8mまでを検出したが、北肩は未検出である。深さは0.3mである。埋土は灰褐色粘質土である。奈良時代の土器が出土したが、小片で詳細な時期は不明である。

SK253 発掘区西端で検出した土坑である。南北0.9m、東西0.8mまでを検出した。深さは0.4mである。埋土から奈良時代中頃の土器が出土した。

SA254 発掘区西半で検出した掘立柱列である。柱間寸法は2.7mである。この発掘区内に北門を想定したが、このSA254はSK253の廃絶後に掘られていることや主軸が西で南にかなり振れることなどから市の北門である可能性は考えにくいと思われる。

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の大部分は土器である。奈良時代の土師器・須恵器が多いが、包含層や素掘溝からは瓦器や灰釉陶器も出土している。しかし、小片が多く図示できるものは少ない。ここでは主にSK249・250から出土した土器を示した。1～6はSK249から、7はSK250から、8は包含層から出土したものである。

1は須恵器杯蓋である。頂部外面を回転ヘラケズリする。2～8は土師器で、2・3は

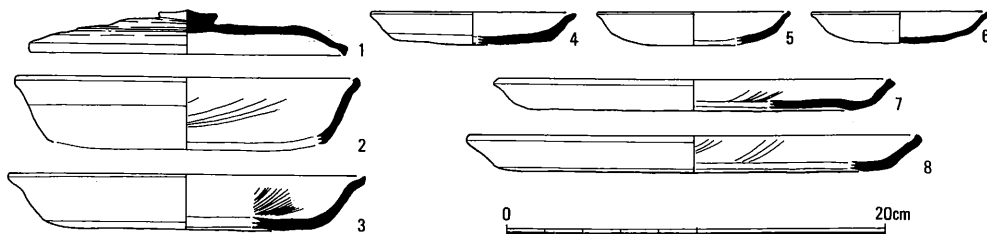


fig. 8 出土土器 (1/4)

杯Aである。両者ともa₀手法で、内面には1段の斜放射暗文がある。4～6は皿Cである。4は口縁部をよこなですが、5・6は剥落が激しく調整は不明。6の口縁端部に黒化した部分があり、灯明皿に用いたものと思われる。7・8は皿Aである。両者ともa₀手法で、内面に1段の斜放射暗文がある。S K249・250から出土した土器には図示できなかった土器にも暗文のあるものがみられ、調整手法などから平城宮土器Ⅲのものであろう。

III まとめ

東市跡推定地の調査は、昭和56年度に実施した第1次調査と昭和61年度の第7次調査以来今回の第16次調査まで六坪の北東部に重点をおいて調査を継続してきた¹⁾。その結果、

- (1)六坪の中心部分では顕著な遺構は認められず、広場のような性格をもったところであったと考えられる(第8・16次調査)
- (2)六坪の北西隅には隅構と考えられる建物が建てられていた(第1次調査)
- (3)六坪と五坪が坪境小路によって区画されていた(第7次調査)
- (4)東三坊坊間路を検出したことから、六坪と十一坪が区画されていたことがわかり、第1・2次調査で検出した北辺の築地は坪ごとにつくられ、東市跡推定地内は一坪ごとに区画されていた(第11次調査)
- (5)六坪東辺の築地には東辺中央よりもやや北の位置に門が開いていた(第12次調査)
- (6)六坪の中央やや東寄りの場所では総柱建物が並んで建てられていた(第9・10・13・14次調査)

などのことから、六坪の北東部は総柱建物が並ぶ一画、比較的規模の大きい建物が建つ一画、中央付近の広場というように3つの地区に使い分けられていたことが窺えるようになった。また、この六坪以外の調査でも、第4次調査を行なった十一坪内では東堀河を検出したことや、北東に位置する十六坪の調査では工房関連の遺構がみつき²⁾、大和郡山市九条町の西市跡推定地の周辺でも工房関連の遺構がみつ³⁾ことを考慮すると、これらの調査成果は文献史料から明らかにされている市の景観と符合するものもあり、木簡等が出土していない現状でのこの遺跡の性格を考えるうえで重要な示唆を与えるものといえよう。

市の周辺には、中央官司の出先施設や諸国の京における物資の集積場である調邸が置かれた市町が存在した。今後、市の存在の解明にあたっては、こういった周辺地域のことも視野にいれながら継続して調査を進めていく必要がある。

1) 奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査 I～XII』1981～1993
2) 奈良県『平城京左京八条三坊発掘調査概報 東市周辺東北地域の調査』1976
3) 大和郡山市教育委員会『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1990

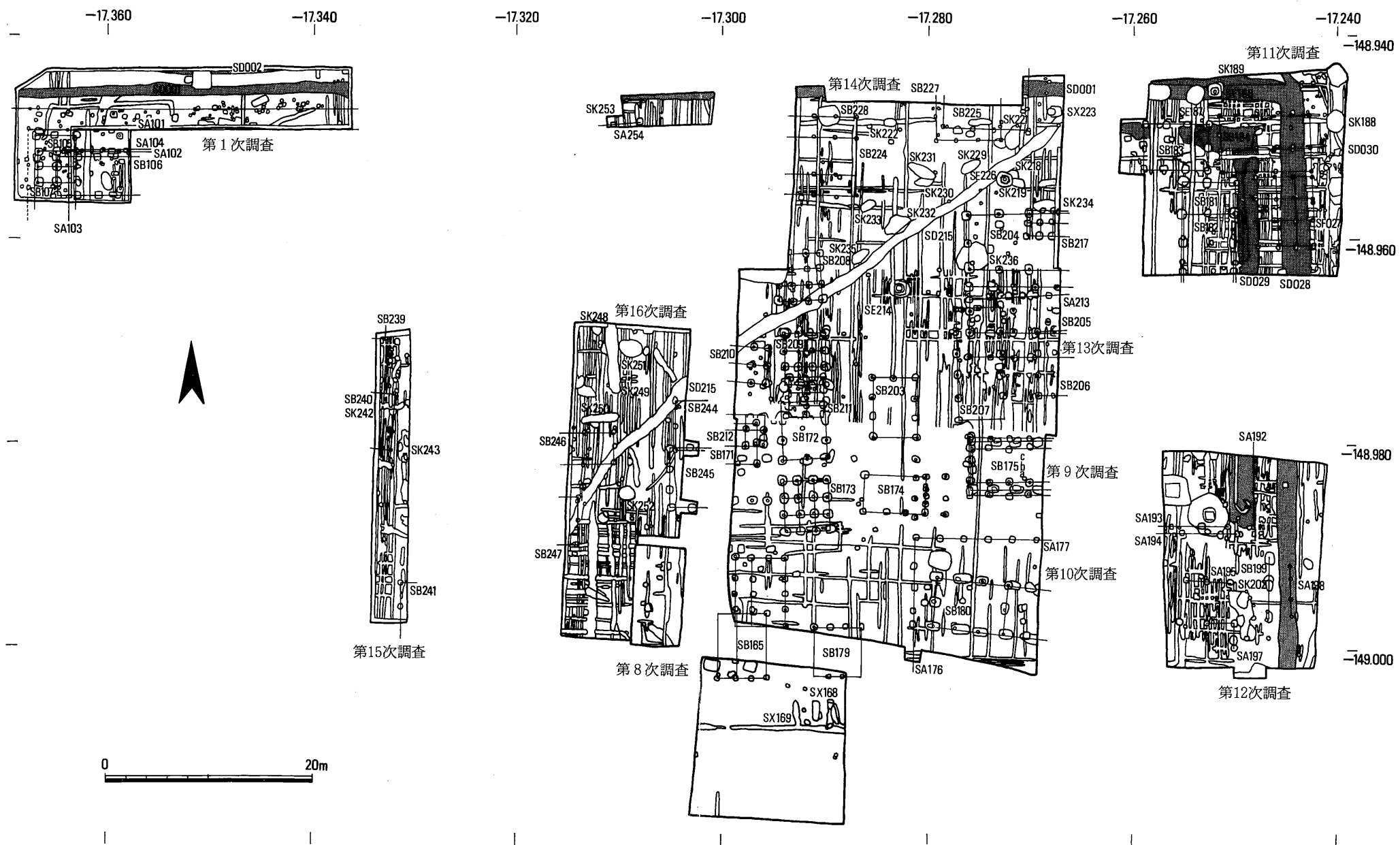


fig. 9 左京八条三坊六坪検出遺構平面図 (1/500)



fig.10 南発掘区全景（北から）



fig.11 南発掘区全景（南から）



fig.12 北発掘区全景（南から）



fig.13 北発掘区全景（東から）



fig.14 建物S B 245 (西から)



fig.15 建物S B 247 (東から)



fig.16 建物S B 246 (東から)



fig.17 土坑S K248 (北から)



fig.18 土坑S K249・250(南から)



fig.19 溝S D215 (西南から)

平城京東市跡推定地の調査 XIII
第16次発掘調査概要

平成7年3月25日 印刷

平成7年3月31日 発行

編集・発行 奈良市教育委員会

(奈良市二条大路南一丁目1-1)

0742-34-1111 (大代)

印刷 共同精版印刷株式会社

(奈良市三条大路二丁目2-6)

0742-33-1221

0742-33-7035 (FAX)

表紙 平城京市指図（浄土宗総本山知恩院所蔵『写経所紙筆授受日記』紙背）